
電車の中の恋

田中タロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電車の中の恋

【Nコード】

N2199L

【作者名】

田中タロウ

【あらすじ】

電車の中で、美女に一目惚れした俺。
それ以来毎日、同じ電車の同じ車両で、彼女を眺めるのが日課になった。

でも、ひょんなことから告白することになり・・・
(2話だけの短いお話です)

前編

ドアが開くと同時に、俺は電車から飛び降り、全力疾走した。
階段を駆け下り、中央改札を潜り抜け、始業時間2分前に会社に駆け込んだ。

セーフ・・・

毎朝、毎朝、本当に疲れる。
冷や冷やものだ。

でも、これも全て彼女のため。
彼女に会うためなら、駅から会社までの500メートル走なんて、どうってことない。

そもそもの始まりは3ヶ月前。
俺は憂鬱な気持ちで電車に揺られていた。
まだ4月だというのに、早くも5月病の勢いだ。

就職氷河期の中、奇跡的に中堅企業の内定を取り付け喜んでいたのも束の間。
入社前研修で告げられた俺の配属先は、生まれ育った東京を遠く離れた関西の地だった。

言葉も文化も全く違い、軽く海外出向状態。

幸い同期には恵まれ、「何、気取って『くじゃん』とかゆーてんねん」と、

毎日激励の言葉を貰っている。

でも、見ず知らずの土地で1人暮らし、というのはやはり疲れる。いつ東京に戻るのかも分からない。

コネも何もない中での営業。

2週間も経たないうちに、俺の疲労はピークに達した。

そのせいなのか、なんなのか。

ある木曜、俺は寝坊した。

時計の針が8時を指しているのを見た時には、なんの冗談かと思った。

入社して2週間で遅刻なんて、シャレにならない！！！！

とにかくスーツに着替えて、鞆とネクタイを掴んでボロアパートを飛び出した。

今時オートロックもついていない木造アパートの階段は、かろうじて俺の大きな足音に耐えたものの、「ミシミシ」と悲鳴を上げた。

だけど、階段が崩れ落ちようが、爆発しようが今の俺には関係ない。とにかく会社だ！！！！

行くのがあんなに憂鬱な会社なのに、遅刻しそうとなればこんなに必死になる。

日本のサラリーマンは悲しい。

って、そんなことでもいい！

俺はホームに入ってきた電車に飛び乗った。

・・・しまった。

これ、各停だ。

そう気づいた時には、もうドアは閉まっていた。

急いで携帯で乗り継ぎを確認するが、幸か不幸かこれより早く会社に着く電車はない。

とどのつまり、急行がない時間帯なのだ。

そうだよな、もう通勤ラッシュは終わってるのだから。

大して身長もなく細い俺は、いつも電車の中でもみくちやにされているが、

今日ばかりはあのラッシュが懐かしい。

仕方なく信じられないくらい空いている席に腰を降ろす。

あー。今日、朝一で会議だったよな・・・

間に合わなかったらどうしよう。

別に俺が出なくなたって、何の影響もないけど、

「この場にいる」ってことが一番大事な会議だもんなー・・・

課長になんて言い訳するか考えていると、

電車が小さな駅に止まり、何人かの人に乗って来た。

ここ、なんて駅だっけ？急行だと通り過ぎるもんな。

ああ、各停がうらめしい。

その時、電車に乗ってきた1人の女性に目が行った。
最初はその荷物に。

大きくて四角い、薄い鞆。

ほら、あれだ。

絵を入れるやつ。

ってことは、当然中には絵が入ってるんだろう。
美大生か何かかな？

こんなところに、そんなのあつたつけ？

そう思い、今度は視線を上げてみる。

そして・・・俺は息を飲んだ。

美しい。

生まれてこのかた、女性に対して「美しい」なんて思ったことがない。

綺麗、とか、かわいい、ならしょっちゅう思うけど、

彼女は違う。

まさに、「美しい」。

思わず、「立てば芍薬 座れば牡丹 歩く姿は百合の花」なんて言葉が頭を過ぎったくらいだ。

背が高く、スタイルがすごくいい。
くつきりした目鼻立ちに、綺麗な長い髪。
そしてその凛とした佇まい。

彼女の周りだけ空気が違う。

俺は生まれて初めて、一目惚れというやつを経験した。

それ以来、俺は毎日その各停に乗るようになった。
彼女も毎日同じ電車の同じ場所に乗る。

もちろん、俺は見てるだけ。
声をかけるなんてできない。

それでも毎日見ていれば、少し彼女のことが分かってきた。

彼女は、俺の住んでる駅から2駅行つたところで乗ってきて、
そこから4駅行つたところで降りる。

服はいつもスーツのように力チツとしたもの。

そしてその大きさは様々だけど、必ず絵らしき物を持っている。

もしかしたら、絵画関係の仕事をしているのかもしれない。

歳は・・・大人っぽく見えるけど、多分まだ若い。
下手すりゃ10代。
よくて二十歳。

俺は22歳だから、年齢的にはいい取り合わせじゃないかなんて虚しいことも考えてみる。

だって、彼女に言い寄る男なんて吐いて捨てるほどいるに違いない。安月給のしがないサラリーマンなんて、見向きもしないだろう。

たく、毎日毎日電車の中で好きな人を見つめる・・・って、どこの少女漫画の主人公だよ。
俺、男だし。

情けなくなりながらも、彼女と会う（一方的に）のをやめられない。

一目でも彼女を見れると、その日仕事を頑張れる。

で、こうして今日も、500メートル走だ。

おかしい。

そう気づけたのは、もう4ヶ月以上、彼女を見続けているからだろう。

一見、変わった様子はない。
いつも通り、荷物が他の客の邪魔にならないように、電車の隅っこで立っている彼女。

ただ、時折、壁に頭をもたれさせる。
それだけ。

それだけだけど、今まで彼女はそんなこと、一度だってしたことが
なかった。

いつもシャキッと立ち、前を見ている。

何かあったのかな。

仕事で失敗したとか？

そうだよな、そーゆーこともあるよな。

頑張れ。

俺は、心の中でエールを送った。

でも、翌日も彼女は元気がなかった。

昨日みたいに、たまに壁に頭を預け、

苦しげに少し口を開いてため息をついたりしている。

もしかして、体調が悪いのか？

顔色もよくない気がする。

電車が、彼女がいつも降りる駅に滑り込み、彼女がドアに向かう。

そして俺も・・・無意識のうちに彼女の後を追っていた。

「あの」

「え？」

ホームで彼女に声をかけて、初めて気づいた。
俺、何してるんだ？

もう電車は行ってしまった。

完全に遅刻だ。

でも、焦る気持ちはない。

それよりも、彼女に声をかけてどうするつもりなのか、自分に呆れてしまった。

「・・・なんでしょうか？」

彼女が訝しげに俺を見る。

あやしいキャッチセールスの兄ちゃんとも思ってるのだろうか。

「えっと」

いきなり「辛そうですね。大丈夫ですか？」なんて言ったら、ドン引きかな？

やばい、どうしよう・・・

「あの、ですね」

「・・・はい」

「僕、」

「・・・」

「あなたのことが、好きなんです」

後編

なーにーを、言ってるんだ俺は！！！！

と、後悔しても、時既に遅し。

口から出た言葉は引つ込められない。

「・・・はあ」

ほら見る！

彼女、困ってるじゃないか！！

「す、すみません、いきなり変なことを！」

「はあ」

「あの、その、何か悩んでるようだったので、思わず・・・」

「・・・え？」

彼女が目丸くした。

こんな表情の彼女は初めて見る。

・・・美しい。

「私・・・そんな風に見えましたか？」

「・・・はい。いつもはもっと、シャンとした感じなのに・・・」

「え？」

しまった。

これじゃ、毎日あなたを見てるんです、って言ってるようなもんじゃないか。

ストーカー一歩手前だ。

でも、彼女は何か他の事を考えてるみたいだった。

「そう、ですか」

「・・・はい」

彼女はしばらく俯いていたけど、やがてハツとしたように顔を上げた。

「あ。すみません。お気持ちは嬉しいんですが・・・」

「・・・ですよね」

そりゃ俺だって「実は私もあなたのことが好きだったんです」なんて言葉は期待してなかった。
むしろ、こう言われて当然だ。

でも、やっぱり凹むな。

「でも、本当にありがとうございます。ちょっと元気が出ました」
「え？」

彼女は寂しげに微笑んだ。

「私、失恋しちゃって・・・それで少し落ち込んでいたんです」
「失恋？」

こんな人が？
一体、どのどいつが振ったんだ！
信じられない！

こんな時に、気の効いた言葉の一つでも言えれば俺ももう少しモテるだろうが、

あいにくそういうスキルは持ち合わせていない。

「そうですか・・・それは、お気の毒に」

なんだ、お気の毒って。

他にもうちよつと言い方があるだろ!?

「失恋ですかー。じゃあ、僕と一緒にすね」

「ええ？」

彼女がビクリして俺を見る。

「一緒に・・・ふふふ、そうですね」

「あははは」

俺は背中に冷や汗を掻きながら、なんとか笑顔を作った。

翌日。

前日に続き、俺は激しく後悔することになった。

少し離れたところで、彼女が軽く会釈する。

俺もつられて頭を下げる。

俺、なんでこの電車乗ってるんだ。

ここ数ヶ月の癖で、いつものあの各停に乗ってしまったのだ。
もう振られたんだし、自分の為にも彼女の為にも、もうこの電車に
乗るべきではなかった。

せめて、車両を変えるべきだ。

それなのに、俺ときたら・・・
なんたる無神経。

俺は心の中で彼女に詫びた。

気まずい思いさせて、ごめん。
明日から、もうこの電車には乗らないから。

せめても、と思い、俺は彼女から顔を逸らし別の方向を向いた。

関西弁で元気におしゃべりする女子高生たち。
髪には、シュシュとか言うゴムをつけている。
流行は東京もこっちも同じだ。

彼女も数年前まではこんな感じだったのかもしれない。

・・・あれ？そういえば、彼女、関西弁じゃなかったよな？

「すみません」

「はい」

「ここ、座ってもいいですか？」

「はあ、どうぞ」

こんだけ空いてるのに、なんでわざわざ俺の隣に座るんだ？
そう思っただけ振り向くと、なんとそこには彼女がいた。

「あつ、お、おはようございます」
「おはようございます」

彼女はストンと腰を降ろした。
その姿はまさに「座れば牡丹」だ。

俺と反対側に鞆を持ち、大切そうに抱える。

「・・・あの、すみません。気まずい思いをさせて・・・明日から
他の電車に乗りますから」

「え？気まずいなんて思ってたませんよ？思ってたなら、ここに座った
りしません」

それもそうだ。

「もしかして、私に会うために毎日この電車に乗ってくれてたんで
すか？」

「・・・はい。すみません、ストーカーみたいで」

「え？ストーカー？・・・ふふふ、そうですね」

「はあ。すみません」

「謝ってばかりですね」

「そうですね、すみません・・・あ」

「ふふ」

彼女は楽しそうに笑った。

心なしか、昨日より元気に見える。

俺はなんとなく、素直に疑問を口にした。

「関西弁じゃないんですね」

「ええ。私、この4月に東京から引越してきたばかりなんです」

「え？ そうなんですか？ 僕もです」

「あら。偶然ですね」

彼女はニツコリと微笑んだ。

「じゃあ、僕達関西初心者ですね」

「そうですね。関西弁って難しいですよ」

「そうそう。課長に『この書類、ほって』って言われて、僕、『え？ 掘るんですか？』って聞いたんです。

『ほって』って『捨てて』って意味なんですね」

「ふふふ」

「後で散々バカにされました」

俺、なんで彼女とこんな普通に話してるんだろう。

昨日、振られたはずなのに。

それ以前に、昨日まで一言も話したことすらなかったのに。

「地理もさっぱりですよ」

「僕、いつも京都タワーを目印に動いてます」

「・・・迷いませんか？」

「迷います。ダメですね、あれは。どこからでも見えるから、目印にならない」

彼女はまたひとしきり笑った。

「ふふふ、そういえば、私、まだ京都タワーって上ったことないなあ」

「僕もです。でも、東京タワーも1度しか行ったことないんですよ」

「私も！小学校の遠足で行ったつきりです」

「そんなもんですよね。この分じゃ、京都タワーに上るのもいつになることやら」

「案外、遠くの通天閣の方に先に上ったりして」

「あああ。あり得る」

「ふふ」

友達同士のような普通の会話。

まるでずっと前から知り合っていたみたいだ。

いや、少なくとも俺は知っていた。

この4ヶ月、彼女だけを見ていたんだ。

それでだろうか。

俺は、自分が振られたのも忘れて、思わずこんなことを言った。

「よかったら、一緒に京都タワーに行きませんか？」

「え？」

とたんに彼女が驚いた顔になる。

まただ！

また、何を言ってるんだ、俺は！！！！

だけど、今度は彼女の表情がすぐに穏やかな物に変わった。

・・・笑顔だ。

って、なんで？

「はい」

「そうですね。こんなこと言われても・・・え？今、はいつて言いました？」

「言いました」

「・・・」

「ダメですか？」

「い、いえ！是非！！」

俺は思わず立ち上がって、気をつけをした。

周りの人が、クスクスと笑っている。

彼女も一緒になって笑っている。

ええ？

えええ？

俺が呆然としてると、今度は彼女が勢い良く立ち上がった。

「あ！」

「！どうしました！？」

彼女は啞然として外を見た。

「・・・乗り過ごしちゃった」

それから俺達は、電車の中で立ったまま、笑い合った。

——「電車の中の恋」完——

後編（後書き）

短いお話ですが、読んで頂きありがとうございました。
本編の「あの子の恋愛事情！」（R18）の方も、
よろしければご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2199/>

電車の中の恋

2010年10月13日14時14分発行